異説御伽噺　「いばら姫」

神田白兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異説御伽噺　「いばら姫」

【Ｎコード】
Ｎ０２１０Ｋ

【作者名】
神田白兎

【あらすじ】
「姫は、十五歳の誕生日、私が殺してやろう」――十三人目の魔女に予言された姫のため、十二人目の魔法使いは、王と妃に男の赤ん坊を授ける。姫を守る騎士となる子を……。愛しい姫を想い続けた騎士の異説「いばら姫」開幕

いばらに覆われたお城の奥に、百年、その姫は眠り続けています。
姫だけではありません。王も妃も、兵士も侍女も料理番も、馬も犬も花にとまった蝶でさえ、百年前から眠り続けています。
たった一人、姫の護衛騎士、姫を守ると誓った騎士だけは、ずっとずっと、百年間ずっと、一睡もせずに待ち続けました。
愛しい姫が、目覚める日を――

その姫は、なかなか子供に恵まれない王と妃との間に生まれたので、王も妃も大喜びで、盛大なパーティーを開きました。
二人は、大切な姫が幸せになるように、良い魔法使いを十二人呼んで、姫に祝福の予言をもらいました。
姫が美しく成長するように、誰よりも優しい心を持つように、暮らしに困ることなどないように、愛しい人と巡り合えるように、そうやって十一人の魔法使いたちは、姫を祝福しました。
けれど、最後の魔法使いが姫に予言を授けようとした時、彼女は現れました。
はるか北の森に住む、悪い魔女。彼女は、パーティーに呼ばれなかったことに怒り、真っ赤な目で姫をにらんで、言いました。
「姫は、十五歳の誕生日、私が殺してやろう」と。
魔女はそれだけを言って、高らかに笑って去って行きました。
王も妃も、城の皆がその予言を恐れました。誰もが十五歳で殺される姫を憐れんで、泣いているところに、まだ予言を授けていなかった魔法使いは言いました。
「大丈夫です。姫は殺させません。私が、姫を守る『騎士』を作りましょう。姫を誰よりも大切に思い、守り抜く、強い騎士を授けましょう」

魔法使いはそう言って、王と妃に男の子の赤ん坊を授けました。
それから姫と騎士は、片時も離れず、ともに育ちました。まるで魂の片割れのごとく、二人は同じ時を過ごしました……

年月がたち、魔法使いの予言通り、姫は美しく、そして優しい心の持ち主に育ちました。その美しさは、誰もが一目で心が奪われるほどで、姫には求婚の話が絶えません。
けれど姫は、どんなに立派な王子に求婚されても、断り続けました。
姫は、生まれたときから傍らで、自分を守り続ける騎士を愛しているから。
そして騎士も、姫を誰よりも何よりも愛していました。
姫と騎士は、王と妃に言いました。
姫は、騎士と結ばれなければ、自分の胸は悲しさのあまり張り裂けてしまう、と。
騎士は、姫と結婚できるのなら、自分の体が百片に切り裂かれても、地獄の焔に百回焼かれてもかまわない、と。
王と妃は、二人の気持ちに説得されて、騎士に条件を一つ言い渡しました。
十五歳の誕生日に、姫を殺すと予言した魔女がいる。その魔女を倒し、姫を守れば、結婚を許してやると、二人は言いました。
姫は、そんな危ないことをさせられないと反対しましたが、騎士は元々その為に生まれた者。喜んで、その条件をのみ、騎士は魔女を倒す旅に出ました。
姫と、約束を交わして。
「貴女の命を脅かすものを倒し、必ず戻ってきて、貴女を娶ります」
騎士の旅は、とても険しいものでした。北に進むにつれて、魔女の手下のコウモリや、蛇に毒虫、悪いドラゴンや悪魔が襲い掛かり、騎士はそれらを全部、倒して前に進みました。

とても辛い旅でした。何度も何度も死にかけて、心が挫けそうになりながらも、騎士は自分の帰りを信じて待つ、愛しい姫を想い、その姫の為に前へと進み、魔女のもとにたどり着きました。

魔女は地獄のかまどのような炎で、騎士を焼き殺そうとしましたが、魔法使いに作られた騎士に、邪悪な魔法は通じません。魔女は、騎士の剣でバッサリ切られ、死にました。

騎士は、魔女を倒しました。

大喜びで彼は、魔女の返り血も拭わず、国へ、城へ、姫の元へ帰りました。

城に戻った騎士を、真っ先に出迎えたのは姫。彼女は、嬉しくて嬉しくてたまらないという顔で、騎士に駆け寄り、手を伸ばしました。

その手が、騎士の手を触れあった瞬間、姫はパタリと倒れました。ピクリとも動かず、息もせず。

魔法使いによって作られた騎士には、邪悪な魔法は通じません。だから、騎士は気が付きませんでした。

自分の全身に浴びた魔女の血は、普通の人間にとっては、一瞬触れるだけで命を奪う、猛毒だったということに……

その日は、姫の十五歳の誕生日。

予言は、もっとも残酷な形で成就してしまいました――

「大丈夫です。魔女の血は貴方の体に触れて浄化されていたから、猛毒ではありません。姫は、死んでいません。……ただ、姫は百年、目覚めることはないでしょう」

騎士を生んだ、良い魔法使いがそう言って、お城に魔法をかけました。お城の誰もが眠りにつき、姫が目覚めると同時に、皆も目覚める魔法を。

けれど、騎士だけがそれを拒みました。

自分は、安らかに眠る資格などないと。自分のせいで百年間眠る姫を、一睡もせずに、何物からも守るべきだと言いました。

魔法使いは、自分を責めて責めて責め抜く騎士を憐れみながら、騎士が百年間眠らずに済む魔法をかけてやり、そして城をいばらで覆いました。

「百年たてば、このいばらは自然に枯れて、人間を招き入れます。招き入れられた愛しい者の口づけが、姫を目覚めさせるでしょう」

魔法使いの言葉に、騎士は何も言いませんでした。

自分には姫にキスをするどころか、もう二度と、髪の毛一本たりとも触れる資格などないと思っていたから。

そうやって騎士は、誰もが眠るいばらに囲まれた城の中、一人っきりで過ごしました。

愛しい人を守れなかったことを、ずっとずっと悔みながら。

騎士は、百年間眠らないどころか、ほとんど何も食べず、飲まず、ただひたすらに姫が目覚める日を待ちました。

待って待って待ち続け、ある日突然、城を覆っていたいばらが枯れ、鎧を着こみ、兜をかぶった王子が、城にやってきました。

姫が目覚める日、姫を目覚めさせる人間が、やってきたのです。

騎士はその王子を、姫が眠る部屋まで案内しました。

やっと、姫が眼を覚ます。長かった呪いがやっと解ける、祝福すべき日だというのに、騎士の心はまるで嵐のように乱れていました。

騎士はまだ、姫を愛しているから。

姫を誰にも、奪われたくないから。

でも、騎士は我慢しました。自分は姫を守れなかった。姫を愛す資格など、とおに失っていると言い聞かせて、耐えました。

……でも、王子が眠っている姫を乱暴に抱きかかえ、キスをしようとした時、もう我慢できませんでした。

大切に、大事に扱ってくれるのならまだしも、姫を粗暴に扱う者になど、絶対に奪われたくないと。

「剣を持て。私と戦え！　姫に触れ、姫を娶るのは、私に勝ってからだ！」

鎧の王子は騎士を嘲笑い、決闘を受けました。百年間眠らず、ほとんど何も食べていない、ボロボロの騎士を甘く見ていたのでしょう。
騎士は確かにボロボロでした。でもこの騎士は、姫を守る為、悪魔やドラゴンとも戦った騎士です。
王子は、騎士の一閃でたやすく倒れ伏しました。
騎士は、姫を目覚めさせる人を、倒してしまいました……

途端に、異変が起こりました。
枯れたはずのいばらが、ベッドで眠る姫に群がるように、生い茂ります。まるで、いばらが姫を包み、食わんばかりに……
騎士は、自分がしでかしてしまったことの重大さに気付きました。せっかく、呪いがとけるはずだったのに、姫が目覚めるはずだったのに、自分はまたしても、姫を守るどころか、姫を危険にさらしていると思い、騎士は泣きながら、姫に群がって茂るいばらのツタを、がむしゃらにむしり取ります。
いばらの棘が、手を、腕を、体を、顔を傷つけ、血があふれ出ますが、そんなことは気にもかけず、彼は一心不乱にいばらを姫からはぎ取ろうと、むしり続けますが、いばらは騎士の体を食い込み、茂るのは止まりません。
「姫……申し訳ありません」
（……愛してます）
騎士は、語りつくせない懺悔と、抑えきれない愛しさで涙しながら、いばらの中で眠る姫に、口づけを交わしました。

「――姫は、貴方のことを責めてなどいません。予言を防ぐことは出来なかったけど、貴方は出来る限りのことをした。誰も、貴方を責めなどしません。
それでも貴方は、自分が許せなかったのですね。でも、貴方は気

付くべきでした。貴方の罪は、姫を守れなかったことではなく、そうやって自分を責め、愛する資格などないと言って、姫の愛を、自分の想いを拒絶したことだと。
言ったでしょう？　姫を目覚めさせるのは、愛しい者の口づけだと……」

魔法使いの声が、どこからともなく聞こえた時には、いばらなどどこにもありませんでした。
騎士の体には、いばらの棘で負った傷は一つもありません。それどころか、騎士が倒したはずの王子は、影も形もなく消え去っていました。
「いばらは、姫を守れなかった貴方の悔恨。王子は、姫に触れたいという貴方の封じた願い。自身の化身をその目で見て、やっと封じていた願いを解き放ち、悔恨のいばらを断ち切りましたね。
もう大丈夫。姫の呪いも、貴方の罪の罰も、今日で終わり」
優しい魔法使いの言葉が終わり、百年間眠り続けた姫が眼を覚ましました。
騎士がしっかりと抱きしめた、腕の中で。

「――おかえりなさい」
騎士が戻ってきた時、言いたくて言いたくてたまらなかった言葉が、紡がれます。
姫の至福の笑顔で。
騎士も、泣きながら、笑いながら、最愛の姫を抱きしめて言った。
「ただいま、戻りました」

（後書き）

物語構成の練習のつもりで始めた、異説御伽噺シリーズ第一弾。
テーマは、「原形をとどめたまま、どこまで童話を改変できるか」
初めなのでこれは、大筋は変えずに、王道な感じでまとめてみました。

こんな駄文を読んでくださって、本当にありがとうございます。
もしよろしければ、感想もお願いします。どんな感想でも、狂喜乱舞して、執筆の糧にしますので。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0210k/

異説御伽噺　「いばら姫」

2010年10月8日15時24分発行